1994. 10. 5

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報　第11号

事務局：東京学芸大学心理学研究室内　〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL&FAX. 0423-27-2890

乗馬セラピーに思う

摂南大学教授
中　澤　和　彦

去る８月、大阪教育大学竹田契一教授のお誘いで、宝塚市制40周年記念事業の一つとして、阪神競馬場で開催された「障害児の乗馬セラピー」に参加した。

宝塚市が昨年、障害児を米国コロラド州ボールダー市のサマーキャンプに派遣して乗馬セラピーを体験し、大きな成果をあげたので、今回、当所、セラピューティック・ライディングセンター（ＣＴＲＣ）のインストラクター、スーザン・カー女史を招いて開催されたのである。

ＣＴＲＣでみられる乗馬セラピーの効果については、①人の話をしっかり聞く力が増す。指示に正しく従う力が増す。②集中力がつき、学習に対する興味が増す。③日常の生活体験に積極性がでる。④方向に対するオリエンテーションがつく。⑤音声化、言語化が増す。⑥新しく獲得したコミュニケーション手段を生活で使用する。⑦明るくなり、人間関係が良くなる。等を竹田教授が紹介しておられ、ＬＤ児に有効であることが判る。

乗馬セラピーの概要を述べる余裕はないが、要は、人馬一体となる乗馬が、人と馬との心身の相互作用によって成り立つことに注目したい。

強制でも受動でもなく、馬に乗ってみたいという自発行動を起点として、乗り手の前進、停止等の意思表示に馬が反応する。この動きに乗り手がまた応じる相互作用が、運動・感覚機能面だけでなく、心理面にも良い結果をもたらすのである。

自発性を培うのは学習の重要課題である。このためには、努力すれば必ず目標が達成できる状況をつくり、学習過程での自発行動がフィードバックできるような応答者の存在が必要になる。そして、学習に不安感を抱かない、相互の信頼感が不可欠である。乗馬でいえば、子どもの自発行動に応えてくれる馬ということになる。ちなみに、乗馬セラピーに適するのは、ハードな訓練に耐えた、人（馬）生経験豊かな８～15歳馬だそうだ。

障害児の乗馬実演を見学しながら、省みて、学校での授業を思った。子どもの能動性を育む相互関係において、馬に及ばない場面はないだろうかと。